２０１１／０７／２４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：感謝の人生２
聖書箇所：ローマ人への手紙　１２章１－２節

私たちは先週からローマ１２章１－２節を学び始めています。**「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」**

Ａ．からだをささげる

私たちは前回、１節から、私たちのからだをささげるということについてみことばを見て来ました。パウロは私たちに自分をささげることが恵みをいただいた者の主なる神への正しい、そして、当然の応答であることを教えてくれました。神からすばらしい祝福をいただいた人にとって、その神を心からほめたたえることは当然のことである、その方を崇めることは当然の行為であるとパウロは言うのです。このことに関して、イギリスのアイザック・ウァッツは、今から数百年も前にこのような讃美歌の歌詞を書きました。イギリスの中で最も美しいと言われている讃美歌です。「栄えの主イエスの」というタイトルですが、讃美歌２１の歌詞はこの通りです（２９７番）。

１．栄えの主イエスの　十字架を仰げば、世の富、ほまれは　塵にぞひとしき。
２．十字架のほかには　誇るものあらず、この世のものみな　消えなば消え去れ。
３．見よ、主のみかしら、み手とみ足より、恵みと悲しみ　こもごも流るる。
４．恵みと悲しみ　ひとつにとけあい、いばらはまばゆき　冠とかがやく。
５．ああ、主の恵みに　応うる道なし、わが身のすべてを、主の前に献ぐ。

パウロが言っていることと同じことを彼は歌っているのです。神の恵みをいただいた私たちが、この神に対してできることは何か？自らのすべてをこの方におささげして「主よ、どうぞあなたのみこころのままに私を使ってください」と言います。主の恵みに心から感謝しているクリスチャンたちは、主への感謝を何とか形で表わそうとします。このすばらしい神を心から崇めたいと思います。そのことは聖書の中を見ると、私たちの先輩がそのような行為を実際に行なっています。

☆主の恵みに感謝して、神を心から崇めた人たちの例

◎　十人のらい病人

十人のらい病人の話がルカの福音書１７章に出てきます。ちょうど、イエス･キリストがエルサレムに上る途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた時のことです。十人のらい病人がイエスに会いに出て来るわけです。彼らは遠く離れたところに立って**「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」**と声を張り上げて言うのです。イエスはこれを見て**「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」**」と彼らにお答えになりました。彼らはこのことばを信じて祭司のところへ出かけて行きました。そして、**「…彼らは行く途中でいやされた。」**と記されています。その後のことです。十人が祭司のもとに走って行って十人とも癒されました。ところが、イエスのもとに戻って来たのはその中のひとりだけでした。１５－１６節に**「そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。」**とあります。ということは、残りの九人にはサマリヤ人以外も含まれていたということです。そこでイエスは彼にこのように言っています。１７－１８節**「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」**と、印象的なのはその後です。１９節に**「それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」**とあります。もちろん、イエスがここで言われていることは、病のいやしだけではありません。心のいやしです。救いのことです。このひとりのらい病人は、自分のからだがいやされるという奇跡を体験しました。そのときに彼は、祭司のところに行くよりも、いやしを与えてくださった主イエスの元に戻って来て、主イエス・キリストこそが神であるゆえに、この方を心から崇めるのです。感謝にあふれている人たちの当然の行為です。主を心からほめたたえている人たちの当然の行為です。彼はこうして神に自らの感謝を表わしました。

◎　弟子たち

ペテロがある時、人々から責められました。なぜなら、ペテロは異邦人のところに出て行ったからです。コルネリオのところに出ていきました。そして、ペテロが異邦人たちとともにいることを知った人々はペテロを非難するわけです。そこでペテロは、その人々に対して、どういう経緯があったのか、

神のみわざについて話し始めるのです。皆さんよくご存じの使徒の働き１１章に出て来ます。ペテロは神が導いてくださったと話します。そして、彼はこう言うのです。ユダヤ人は主イエス･キリストを信じた時に聖霊のバプテスマをいただいた。そして、神は同じことを異邦人にもなされたと。１１：１７**「こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」う。」**、ペテロがこうしてすべてのことは自分の勝手な行動ではなく神の導きであり、しかも、神がユダヤ人だけではなく異邦人も同じように救われたと言ったときに、それを聞いていた弟子たちはどのように反応したのか？１８節**「人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」と言って、神をほめたたえた。」**」とあります。神の恵みを知った人々は、その神を賛美し、感謝し、神に礼拝をささげたいと心から思います。神の為されたそのすばらしいみわざを覚えれば覚えるほど、その方に何とか自らの感謝を表わしたいと思います。そのようにして彼らは歩んだのです。そのようにして彼らは自らの感謝を行動をもって表わしたのです。これは新約の話です。旧約はどうだったでしょう？

◎　モーセ

　モーセを思い出してください。モーセに率いられたイスラエルの民は紅海までやって来ました。後ろを振り返ると、エジプト軍が迫って来ています。ある人たちは動揺したでしょう。自分たちの前は海だ。そして、後ろからは自分たちを捕えるために、自分たちを殺すために、土煙を上げて向かって来るエジプトの軍隊。この後どうなってしまうのだろうと非常な恐れを抱いていた彼らに、神は、皆さんよくご存じのように、紅海を真っ二つに裂かれました。そして、イスラエルの民はその紅海の乾いた地を渡って対岸に到達しました。エジプトの軍隊も同じようにその乾いたところを通ろうとした時に、海が元に戻って彼らはそこで溺れ死んでしまったと、そのことが記されています。このような出来事を目の当たりにしたモーセとイスラエル人たちは何をしたのか？出エジプト１５章にそのことが記されています。１－２節に**「そこで、モーセとイスラエル人は、主に向かって、この歌を歌った。彼らは言った。「主に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。:2 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」**とあります。

　ですから、旧約の時代であろうと新約の時代であろうと、神のすばらしい恵みを体験した者たちがしたことはみな共通しているのです。その恵みの主を心から崇めることでした。

→　確かに、主によって救われた者たちは、時代を越えて、その感謝を形をもって表わした。

◎　パウロ

　パウロは私たちに、神の恵みのゆえに、神のあわれみのゆえに、神の為してくださったすばらしい救いのみわざのゆえに、私たちはその方に心からの感謝をささげたいと、そう思うのは当然だと教えます。そして、それは具体的に言えば、私たちのすべてをこの方におささげすること、パウロは１節で、私たちのからだを神におささげすることをもって、私たちの感謝を表わすことができると言いました。

　実は、この１２章の前の１１章の終わりにパウロは、主の偉大さを思うときに、パウロ自身が同じようにこの神を心から賛美、礼拝している様子が記されていました。ローマ１１：３３**「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**。神のすばらしさを覚えたときに、３６節**「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」**と、どの時代の人であってもみな同じなのです。神の恵みに感動した者たちは、その神に対する感謝をこのような形で表わそうとして来ました。パウロはこの神だけが最高の称賛に値するお方であるということを知って、その方を心から崇めようとします。

　ですから、このように言えます。「主なる神が喜ばれる礼拝は、主についての正しい知識から生まれる。」と。私たちが礼拝しているこの神はどういうお方か？そのことを知れば知るほど私たちは心からその方に対する正しい礼拝をささげる者になります。この方が私のためにいったい何をしてくださったのかを知れば知るほど、私たちはこの方を正しく崇めるという行為を実践することになります。そして、この方が今の私たちの生活において何をしてくださっているのか、それを覚えることによって私たちは、この方に対して心からの感謝を表わそうとします。詩篇１０３：２で著者が**「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」**と言う通りです。私たちの問題はそこにあります。神のしてくださったことを覚えているときは感謝します。しかし、それをすぐに忘れてしまうから、かつて持っていた感謝がなくなってしまうのです。礼拝も形だけのものになってしまって、いつの間にか、心が伴っていない礼拝をささげてしまうという問題があります。だから、覚え続けなければいけないのです。私の神がどんなお方であり、どんなことを為してくださり、今、私のうちに何を為して

くださっているのか？この真理を知れば知るほど、それにふさわしい礼拝が生まれて来ます。パウロは私たちにそのように言うのです。

☆　霊的な礼拝

１．感謝の証　：　礼拝

もう一度１２：１をごらんください。１節の最後に**「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」**とありました。前回見たように、こうして神を崇めることは、救われた私たちの当然の応答です。この１節を終えるに当たってもう一つ考えておきたいことは「礼拝」ということについてです。パウロは「礼拝」は私たちの感謝を表わす方法として最善のものであると言います。そして、その「礼拝」はどういうものであり、どのような礼拝を神が望んでおられるのか？そのことをここで教えています。

この「礼拝」ということば、確かに、日本語ではこのように訳されていますが、実は、ここで使われているギリシャ語は、新約聖書の中にここも含めて５回しか出て来ないことばを使っています。一般的には他のことばが使われるのです。その一般的な「礼拝」ということばは、新約聖書の中に１１２回も出て来ます。パウロは敢えて、ここでこの５回しか使われていないことばを使うのです。そのことばの意味は「神に仕える、神を敬う」です。そして、５箇所のうち１箇所だけ日本語では「奉仕」と訳されています。あとは全部「礼拝」と訳されています。

では、もしパウロが一般的な「礼拝」ということばを使ったらどうでしょう？そのことばは「人に向かってひれ伏してその手に接吻する」とか、「目上の人に平伏して敬意を表わす」とか、「神に対して礼拝をささげる」という意味を持っています。ですから、どちらのことばを使ったとしても、礼拝に関して次のことが言えるのです。「礼拝とは、私たち自身が神にささげるもので、神から何かをいただくものではない」ということです。私たち自身がこの方に仕え、この方を敬うのであって、この方から何かいただくのは礼拝ではないのです。ですから、皆さんが何かを期待して礼拝に集まっておられるなら、それは正しい動機ではないのです。神の祝福をいただいた者として、その祝福に対して、神に対して感謝を表わすために集まる、それが礼拝であると、このことばもそのように私たちに教えてくれるのです。

ジョン・マッカーサー先生は「礼拝とは、神に向けられた誉れと崇敬である」と言っています。神がどういうお方であるかということを覚える時に、その方にふさわしい誉れと、そして、その方を心から崇めようとするのです。だから、私たちが先ほどから見ているように、神がどういうお方か、どういうことを為してくださったのか、今、どういうことをしておられるのか、この真理をしっかりと知らなければいけないです。

信仰者の皆さん、恐らく、皆さんは今日ここに、少なくともその心の中に主なる神に対する感謝をもって集まって来られたと信じます。主は私たちを「どうして？」と思うほど祝福し続けてくださっています。私はある証を聞きました。「神さま、どうぞ、もう祝福を留めてください。もう十分いただいています。どうしてこんなにまで私が祝されるのでしょう？」と。大切なことを言っていると思います。私たち信仰者はみな、そのように告白する者たちだと思いませんか？なぜなら、私たちは罪の中を神に背きながら生きていたのに、神がそこから私たちを救ってくださり、生まれ変わらせてくださったのです。しかし、生まれ変わった私たちは日々の生活においてどれ程神を悲しませているでしょう？神を第一に愛すると言いながら、私たちはどれ程神を第二、第三にしているかです。神に賛美をささげていながら、私たちの賛美には神に喜ばれない賛美がたくさんあります。神に礼拝をささげていても、その礼拝は神から「もう十分だ、聞きたくない」と言われるような礼拝かもしれません。なぜ、今私がここに座っているのか、なぜ、今、私がここに立っているのかと思いませんか？今この瞬間に神が私たちを滅ぼしてもおかしくないのです。そういう存在だからです。しかし、神はあわれみをもってあなたや私を生かしてくださり、こんなに罪深くてどうしようもない者にこのような祝福を与えてくださり、永遠の希望をくださり、そして、今日も祝福で満たしてくださっているのです。

今朝、私がみことばを見ている時に、外でウグイスが一生懸命鳴いていました。神のお造りになったその被造物が、私たちの神のすばらしさを称えています。私たちはもっともっと神の恵みを覚えて、神のすばらしさを称え続けていく必要があると思いませんか？私たちの口から出て来るのは愚痴であったり不満であったり、「神さま、あの人にあのようなものが与えられているのに、私には与えられていません」と不満ばかり言っていませんか？もしそうなら、私たちは心から感謝して神を礼拝することなどできません。なぜなら、神に対する礼拝は、神の為してくださった恵みのみわざに対する心からの応答だからです。そのような礼拝をささげていないなら「神さま、どうぞ私をあなたのみこころのままに使ってください」と言えるでしょうか？「神さま、これを満たしてくださったら、この祈りに答えてくださったら、まあ、使っていただいてもいいかな？」というようなことを言っていませんか？

礼拝は私たちの応答です。神がすでに為してくださったそのすばらしいみ恵みに対する、私たちの心からなる応答なのです。神への感謝です。だから、私たちの内側からわき上がってこなければいけない

のです。人から強制されて、特別な音楽を聞いて、特別な体験をするからそうなるのか？違うのです。神の恵みを見たときに、イエス・キリストの十字架を見上げたときに、あの十字架が私の身代わりであったことを覚えるときに、私たちは心から「主よ、私はあなたのために何をしましょう？」、「私は私のすべてをもってあなたに仕えて行きたい、あなたのすばらしさを表わしていきたい」と、そのような感謝にあふれた思いが内側から上がってくる、それが礼拝にふさわしい心なのです。そのことをパウロは私たちに教えてくれるのです。あなたのからだを喜んで主にささげなさい。神がこんなにすごいみわざを為してくださったから。皆さん、そのように信仰生活を生きていますか？「主よ、私を使ってください。あなたによって贖われた者です。あなたによって救われた者です。あなたによって生まれ変わった者です。私を使ってください。」と、それが私たちの主に対する感謝です。皆さん、そのように生きていますか？

２．感謝の実践

２節では**「この世と調子を合わせてはいけません。」**と言います。かつての生き方を繰り返してはいけないと言うのです。神を第二、第三に、いや、救われる前は神を全く無視して生きていたわけでしょう？救われた後、私たちも神を第二、第三、第四に置いて、それ以外のものを優先する、そのような歩みをしていないでしょうか？問題はどこにあるか？神の恵みを忘れてしまっているのです。神があなたのために何をしてくださったのか？パウロは、ただこのようなことをすればいいと言ったのではありません。「からだをささげる？わかった、それでいいのか？」、いいえ、当然、パウロは具体的にそのように生きて行くことを望んでいます。当たり前のことです。口でどんなにいいことを言っていても、神の関心はそれを実践するかどうかです。パウロはここで「あなたがたのからだを生きた供え物としてささげなさい。それが霊的な礼拝だ。ふさわしい行為だ。」と言いました。

では、具体的に、私たちが考えなければいけないのは、パウロがどういう生き方を言わんとしているかということです。どのように歩んで行くことが神の前に正しいことなのかです。それはこういうことです。このような公の礼拝もそうです。皆さんの為さっておられる教会での様々な奉仕もそうです。伝道の働きもそうです。また、社会にあって為しておられる仕事もそうです。学生たちがやっている学業もそうです。主婦がやっておられる家事もそうです。皆さんがやっておられる子育てもそうです。すべてのことです。このリストは続きます。あなたのしておられるすべてのことを神への感謝のしるしとして、感謝のささげ物として、また、神に喜んでいただくことを目標としてやって行きなさいと言うのです。ここまでは神のため、これからは自分の時間です、自分のためにとか、そのようなことではないのです。すべて、朝から晩まで、２４時間、３６５日、あなたが地上に置かれている間、そのように生きなさいと言うのです。「神さま、そんなことはちょっと難し過ぎます。できません。」と思っていませんか？しかし、神は「可能だ、できる」と言われます。なぜですか？救われたからです。

→　それゆえ、

①　主の働きがある

あなたが救われることによって、助け主なる神があなたのうちに内住してくださっているでしょう？このような祝福を私たちクリスチャンはいただいたのです。ですから、そのような生き方を、私たちのうちに住んでおられる助け主なる神が助けてくださるのです。

②　私たちの願いである　：　私たちもそのことを行ないたいという願いをいただいている

しかも同時に、私たちにはそのように生きて行きたいという思いが与えられました。救われているあなたはそのように生きて行きたいと思っていませんか？すべてをもって私の感謝を表わしたい、私の為すこと、私の考えること、私のすべてをもって私の感謝をこの主に表わして行きたいと、そのような思いをもって生きる者へと私たちは生まれ変わったのです。パウロはローマ７：１８で**「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」**と言っています。救われる前と救われた後の変化は何かと言うと、救われた人には善をしたいという願いがあると言います。神はこのような変化を私たちにもたらしてくれたのです。

では、すべての点において常に神の前に正しいこと、善を行なっているかというと、パウロ自身が告白するように、悲しいけど、それができていなのです。では、救われたとはどういうことなのか？そういう願いが私たちのうちに与えられたことです。救われる前にはもっていなかった新しい願いを、神は私たちにくださったのです。同じ７：２２には**「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、」**とあります。私は神の教え、神の命令を今まで毛嫌いし、そういうものに背を向けて自分の好きなように生きていたのに、生まれ変わった私は、神の教えを心から愛し、その命令に喜んで従って行きたいという思いをもっている。このような変化を神は私にもたらしてくれた。だから救われたのです。Ⅱコリント５：９には**「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願と**

するところは、主に喜ばれることです。」とあります。これがクリスチャンの特徴です。
　神に喜んでいただきたい。何とか神を喜ばせたい。そういう新しい願いをもって生きる者へと私たちは生まれ変わったのです。神のみわざです。悲しいことは、先ほども話したように、必ずしも、私たちはそのように生きて行けないという現実です。罪を犯すという現実です。神が悲しまれることを選択してしまうという現実です。しかし、少なくともイエスによって救われた者たちのうちには、そのような新しい思いが与えられているのです。だから、この神のことを私たちは詳しく知ることが必要です。正しく知ることが必要です。なぜなら、主なる神への正しい知識は、私たちの新しい性格に反映し、それが行動となって現われて行くからです。言い方を変えるなら、私たちの行動は私たちが主を知っていることの証です。だから、私たちは「クリスチャンは偽善的だ」ということばを聞くと心が痛みます。私たちの主が本物かどうかを世の中は見ています。私たちに必要なことは、私たちを変え続けてくださる神に自らをゆだねて行くことです。こうして私たちを愛して、私たちに救いをもたらしてくださった恵みの神に自らをゆだねて行くときに必要なもの、神に喜ばれる歩みを為していくために必要なもの、それは１００％神の助けです。

◎　希望のないキリスト者が多いこと

　正直、残念なことは、希望のないクリスチャンが結構多いということです。また、自分は神に用いられないと思っているクリスチャンが実際に多いです。希望を持っていないクリスチャン、自分は神に用いられることはないと思って生きているクリスチャンが多いというのは非常に悲しいことであり、また、驚きです。もちろん、いろんな理由があります。大きく分けて肉体的な部分と霊的な部分があります。

①　肉体的弱さ

　肉体的な部分とは、例えば、病で入院している。こういう状態だから神に仕えることができないし、神に用いていただくこともできない。だから、退院したら…と考えます。でも、退院しない場合もあります。そうすると、こういうことを言うのです。「神は条件つきで人を用いる」と。その通りだと思いますか？元気で入院していない人を神は用いる。入院している人を神は用いることはできない。でもそれはみことばに反するわけです。なぜなら、神はあなた自身を主にゆだねなさいと言うのです。あなたのからだを主にゆだねなさいと言うのです。なぜですか？神が用いてくれるからです。そこに条件はついていないのです。でも、私たちは勝手に条件を付けるのです。「私は年老いていて、どこに行くにもだれかの助けが必要だから神に仕えることは無理です」とか「もう私の先は短いから無理です」とか。

②　霊的弱さ

　また、霊的な弱さを覚えている人は「自分は罪深いからだめだ」とか、また、「霊的なことはよくわからないから私には無理です」と言います。どのような理由であっても、このような理由はすべて間違っています。

≪これらが間違っている理由≫

①　主の命令に反している　　②　自分の力に頼っている

　なぜ、間違っているのでしょう？１２：１のみことばを見ていただくと、そういう考え方は主の命令に真っ向から反しているからです。主が命じておられることが何だったか、もう一度思い出してください。主が私たち信仰者に命じられたのは「あなたのからだを主にささげなさい」でした。今、話したように、そこには条件はありません。年齢は３０歳から５０歳までとか、健康な人に限るとか、こういった学問を受けた人に限る、こういう訓練をした人に限るとか、こういう働きをして来た人に限るなど、どこにも記されていないのです。つまり、それは神の条件ではないからです。神があなたにおっしゃっていることは、病院にあろうと、健康であろうと、若かろうと、年老いていようと、あなたに望んでいることはあなたのからだを生きた供え物として主にささげなさいということです。主よ、私のすべてをささげます、どうぞ私を用いてくださいと、自らをささげることだと言うのです。それが、神の命令なのです。では、入院していたらどうしますか？確かに、家にいるときに比べたら自由が少ないかもしれません。「でも、私はあなたに自らをささげます。あなたのみこころのままに用いてください。」と言います。病院に行って、余命がどれだけと言われたとしても関係ないのです。なぜなら、だれも明日のことは分からないからです。今日が最後かもしれない。それなら、私たちが言うことは「主よ、どうぞ、今日あなたの器として私を用いてください」です。そのようにして生きて行くのです。これまでの生き方とは違うのです。新しい生き方です。

◎　新しい歩みが可能な理由（用いられる理由）　：　救われたから

　新しい生き方を実践できるのは私たちが救われているからです。ローマ６章を見てください。４節でパウロは「キリスト者の定義」をしています。

①　主イエスとともに葬られ

　３節で**「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみ**

な、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。」と死の話をしています。４節では**「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。」**と、また死の話をしています。

②　そして、「主イエスとともによみがえった」者である

その後、**「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、」**とよみがえりの話をしています。パウロは死とよみがえりのことを言っています。こういうことです。神が神の恵みによって救われたクリスチャンであるあなたをお用いになる理由は、あなたが生きているからです。主を信じるまで、救いに与るまで、主に用いられる可能性はなかったこと、神があなたをお用いにならなかったのは「あなたが死んでいたからだ」と言うのです。

放蕩息子の話があります。二人の息子がいて、弟の方がお父さんに頼んで財産の分け前をもらって、町に出て行って放蕩するということです。そして、彼がすべてのものを使い果たした後、ユダヤ人でありながら、彼らが忌み嫌うようなことをして、何とか生活を維持したわけです。そして、ある時、お父さんのところに帰ろうと気づくのです。彼がお父さんのところに向かっているとき、お父さんの方が彼のところに歩みよって彼を迎え入れたとあります。ルカの福音書１５章に記されています。そこで、おもしろいことが言われているのです。この放蕩した弟の兄が非常にひがむのです。そして、お父さんに食ってかかるのです。父親がこんなことを言います。１５：３２**「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」**と。弟は肉体的には死んでいません。霊的に死んでいたのです。救いのことです。この弟が父の元に戻って行く、イエスはここで救いのことを話されているのです。コインの話をされました。羊の話をされました。そして、放蕩息子の話をされました。救われていない人たちは「死んでいる」のです。死んでいる人を用いることはできません。でも、救われるということは死んでいた者が生き返ることです。生きているのです。だから、用いられるのです。

③　新しい生活が始まる　：　主なる神の力による新しい歩み

先ほどのローマ６：４で、パウロは死んだこととよみがえりのことを言いました。その後を見てください。４節**「…よみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」**と言っています。何を言っているのでしょう？私たちは生きているから神に用いられるということです。だから、信仰者の皆さん、あなたが神の救いをいただいているなら、例外なく、神はあなたをお用いになるのです。なぜなら、あなたは今生きているから、神が生かしてくださったからです。そして、生かしてくださった神があなたを神の器として用いると言うのです。かつての私たちは不義の器でした。罪に汚れた者でした。神のご用に役立たない者でした。ところが、私たちは清められて、今度は、神に役立つ者として、神の器として用いられる存在となったのです。

◎　私たちの問題

もし、あなたが何があったとしても、何を言われたとしても、私は用いられないと心に堅くもって、神のみことばに従わないということは何を意味するのでしょう？本来ならば、あなたを用いてくださっている神の約束に対して、いつも真実なすばらしい神の証をするべき私たちが、神のおっしゃっていることを「いや、無理だ！」と言ってしないこと、それによってあなたは、確かに聖書ではそのように言われているが、約束を守らない不誠実な神がおられる、そのような神を私は信じているということを証していることになるのです。皆さんが、「聖書にそう書いてあるじゃないですか！」と言われて「それはある一部の人のことで、私には……」と、もし、そのように言うなら、あなたは人々にあなたの神というのは全能ではないことを明らかにしています。神の約束にはある条件がついていると言うのです。私たちの問題にお気づきになりますか？神は使うと言ったのに、私たちが無理だと言っているのです。問題は私たちにあります。私たちの不信仰です。神のおことばを信じ切れないのです。なぜですか？

自分の常識に照らし合わせて見たときにそれは不可能に思えるからと。私たちは不信仰を止めなければいけないのです。神が言われたことは「もし、あなたがあなたのために為したわたしのみわざに感謝しているのなら、あなたを愛して、そして、あなたの罪を赦して、あなたを生まれ変わらせたわたしを見上げているならば、わたしにあなたのすべてをゆだねて、わたしの器として歩んでいきなさい。」です。そのように言われたときに、「主よ、その通りに生きて行きたいです。そのように生きて行きたいです。」と、そのように願うのが当然の応答です。

３．神からの務め

神はあなたを使ってくださると、私たちがすでに見て来たように、私たちはキリストの証人であると。私たちは神によって贖われた者として、贖ってくださった、救ってくださったすばらしい神を宣べ伝えるのです。Ｉペテロ２：９－１２にそのことが記されています。**「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべ**

き光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」、この目的のためにあなたは救われているのです。そして、その目的をあなたが果たして行くためには、あなた自身を主の前にゆだね続けて行かなければいけないのです。**「:10 あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」**、救いのことです。神のあわれみを受ける資格のない者が、今、神のあわれみをいただいている。だから、この神のあわれみによって救われた私たちは、神のすばらしい救いのみわざを伝え、神の偉大さを人々に伝えて行く、それが私たちに与えられた神からの務めです。**「:11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。:12 異邦人の中にあって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」**とあります。ペテロはなぜこのようなことを言うのでしょう？このすばらしい神のことを伝えて行きなさいと、それでよかったのに、最後にペテロは**「りっぱにふるまいなさい。」**と言います。しかも、彼は、人々があなたにどんなに悪いことをしたとしても、あなたはその中で**「りっぱにふるまいなさい。」**と。人の悪に対して悪で報いるのではないと。なぜ、そんなことを言ったのでしょう？その理由は**「おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」**と書かれています。もし、あなたが日々の生活において、たとえどんなことがあったとしても、あなたが神の前に正しいことをして、神が喜ばれることをして歩んで行くならば、神の器として歩んで行くならば、神はあなたを人々の救いのために使ってくれるのです。そして、その救われた者たちが、最後の時に、神をともに崇める者になると言うのです。神はこのように私たちを使ってくださるのです。

今日、私たちが見て来たように、神はあなたを祝してくださっています。救いを与え、日々の生活において主に喜んで従って行くためのすべての恵みを備えてくださっています。助け主を私たちのうちに与えてくださいました。必要なものは全部備えられています。そして、あなたのからだをわたしにささげなさいと言われます。私たちが「分かりました。神さま、ありがとう！どうぞ、私をあなたのみこころのままにお用いください」とささげ続けていくならば、神は今見て来たように、あなたを神のすばらしい証をなす器として用いていってくれるのです。病院に入院していようと、先が短かかろうと、みことばをそんなに知らなくても、そんなあなたを使うのです。その結果、あなたを使った神がほめたたえられるのです。あなたが「イエス」と言って「神さま、使ってください」と言うときに、人々はあなたのうちに働いている神を見てその神を崇めるのです。あなたではありません。それが私たちの希望です。私たちに誉められる資格はありません。誉められるのは、こんな私を神の栄光のために使ってくださる神です。パウロはそのようにして生きなさいと言うのです。

では、あなたはこれからどのように生きて行きますか？恐らく、この中の多くの皆さんは、今パウロが教えたように、あなたのからだを主にゆだねて「主よ、どうぞ、あなたの器として私を用いてください」と、そのような祈りを持ち続けながら、主の栄光を現わしていらっしゃいます。主があなたを豊かに祝してくれるようにと願います。そして、この中で、そのように生きて来なかったけれども、みことばがそのように教えるから、確かに、主の恵みを見たときに、そのように生きて行きたいと思われるなら、今からそのように生き始めることです。主は言われたのです。あなたのからだを生きた供え物としてわたしにささげなさいと。そのことをすることです。そして、「主よ、どうぞ私を使ってください。私のためではなくあなたのために。」と、そのときに主があなたのうちに働かれるのです。すばらしい約束だと思いませんか？創造主なる神が、この世界の唯一の主権者なる神が、救い主なる神が、あなたのために喜んで犠牲を払ってくださった神が、あなたを使ってくれるのです。その方の目的のために。今日からそのことを願いながら、ここにいらっしゃる皆さんがそのような歩みを始めてくださることを心から期待します。そのような決心をもって出て行きましょう。そして、私たちのすばらしい神がより多くの人々の間でほめたたえられ続けていくように、そのことを願いながら、私のすべてを、あなたのすべてをこの方にささげましょう。「主よ、私を使ってください」と。

詩篇９６：２－３**「主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。:3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。」**

《考えましょう》

１．なぜ、神は私たちキリスト者に礼拝を求めておられるのでしょう？
２．なぜ、神は心からの礼拝を喜ばれるのでしょう？
３．心からの礼拝をささげるために気をつけなければならないことは何でしょう？
４．神があなたを用いてくださる理由を考えてください。
５．不信仰に勝利するにはどうすればよいのでしょう？